「言語文化」を終えて

三代純平

はじめて、この活動に参加したのは今から、4 年前、まだぼくは大学三年生のときだった。あの時は学生として参加していた。何の因果か、それから、4 年間、何らかの形でこの活動に関り、今は司会としてこの活動に参加している。

今回の活動で、最後に「わたしにとって日本社会とは何か」というテーマで書いてもらった。書いてもらったことにこの活動の総括として意義はあったと思うし、皆のレポートを見てもらえば、それは分かってもらえるだろう。しかし、実はぼくもその問いに対して、明確な答えがあるわけではない。4 年間、ずっと頭を悩ませ続けているが、答えは出ない。「ことば」とは何か？　「文化」とは何か？　「社会」とは何か？　ぐるぐると頭の中でまわっているがいっこうに答えは出そうにない。たぶんずっとでないだろう。

それでも、このような活動を通して、考え続けていくことには意味があると思う。授業中、アイデンティティの話しが出た。最近、「アイデンティティ」ということばはできるだけ使わないようにしていた。自分が誰かなんて知らないし、自分を何かと同定しようなんていう気もぼくにはさらさらない。だけど、プロセスとしての「アイデンティフィケーション」ということは悪くないかなとも思う。なんだかよく分からない自分が、なんだかよくわからない社会で、「ぼく」として、どう生きるのか、どう考えるのかを主張していくことは必要なのかなと思う。そのために、ひとつのテーマを持って、一人の人間として、一人の人間とじっくり話したインタヴューという活動は意味があったのではないだろうか。

また、この活動に参加していつも考えるのは、本当にいろいろな人がいるということだ。当たり前のことだが、一人一人考えていることがぜんぜん違う。このクラスにはさまざまな年齢、さまざまな国籍を背景に持っている人がこのクラスに集まる。だが、実はそんなことはたいした問題じゃない。一人一人が本当に多様な考えを持っている。何人かがレポートの中でこのクラスの多様さこそが社会の多様さをあらわしている、と書いていたが、本当にそのとおりだと思う。

さらに、今回面白かったのは、その多様な人間がおのおのの好きなテーマでレポートを書いているのに関らず、その中で何かしらの共通の目指すもの、考えるべきテーマのようなものが生まれたことだ。実はこのことは 4 年間の活動で今回がはじめてだったように思う。そのテーマがなんだったかをここに書くのは野暮だろう。それは一人一人のレポートを読んで、読んだ人が考えるべきものであるような気がする。

だが、このように多様な個が、その多様な個を残したまま、共通の何かを、活動を通して持つ。ここにひとつの新しい文化が生まれた気がする。それは、伝統的なものとか、受け継いでいくべきものとか、実体のある何かとか、そういうものではない。一緒に何か活動することで、その場だけにたち現れる何かである。これはぼくにとって新しい発見だっ

た。この発見が自分の中で内省され、意味を持つためにはもう少し時間がかかりそうだが･･･

　なんだか、あわただしく書いてしまったが、最後に、すばらしいレポートを完成した「言語文化」クラスのメンバーに敬意と感謝の念を記して終わりにしたい。